

ミステリー列車が消えた

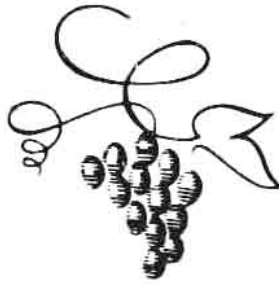
西村京太郎



新 潮 文 庫

ミステリー列車が消えた

西村京太郎 著



新 潮 社 版

334^I

ミステリー列車が消えた^{れつしや き}

新潮文庫

草 285 = 2



昭和六十年一月十五日 印刷
昭和六十年一月二十五日 発行

著 者 西村 京太郎^{にしむら きやうたろう}

発行者 佐藤 亮一^{さとう りやういち}

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
業務部(〇三)二六六一五一
電話 編集部(〇三)二六六一五四四〇
振替 東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦 製本・憲專堂製本株式会社
© Kyôtarô Nishimura 1982 Printed in Japan

ISBN4-10-128502-0 C0193

新 潮 文 庫

ミステリー列車が消えた

西村京太郎 著



新 潮 社 版

334^I

ミステリー列車が消えた

東京駅

1

東京駅、午後十一時三十分（二三時三〇分）。

いつもなら、9番線から、二三時二五分発の大垣行の電車が出てしまうと、東海道本線の一番八重洲口寄りのホームは、人の気配が消えてしまう。

もう、このホームから出発する列車がないからである。

しかし、八月八日のこの日は、違っていた。

10番線から、二三時五九分に、臨時列車「ミステリー号」が発車するからである。

国鉄は、赤字に悩んでいる。瀕死の巨象と呼ぶ人もいる。

それを表す数字に、営業係数がある。百円の収入をあげるのに、経費がいくらかかるかを示す数字である。

黒字のナンバー1は、新幹線で、営業係数は六〇だが、国鉄全線の平均営業係数は一五五

に達する。つまり、走れば走るほど、赤字が、増えるということである。

その赤字を、少しでも減らそうと、さまざま企画が立てられた。

臨時列車も、その一つだった。

「銀河鉄道999」という劇画が流行^{はや}ったときには、同じ名前の臨時列車を出し、これが好評で、乗車希望者が殺到した。

SLブームの時は、「山口線のSLを見に行く」臨時列車を出した。これも、好評だった。それに味をしめたというわけでもないのだが、国鉄が、新しく企画したのが、今日の「ミステリー号」である。

ミステリー列車らしく、行先は不明ということにした。
発表されたのは、次のことだけである。

出発 八月八日(土) 午後十一時五十九分 東京駅10番線

帰着 八月十日(月) 午前九時三十分

ブルートレイン B寝台を使用。

途中で、いろいろと楽しい行事を予定。

募集人員 四百人

大人三万円 小人一万五千元

行先不明ということが、かえって興味を呼んだのか、定員の二十倍を越す応募のハガキが殺到した。

学童に限定しなかったために、アベックで応募してきた二十代の男女もいるし、五人、六人の家族として、申し込んだ人もいる。

厳正に抽選して、四百人が決まり、通知されたのが、一カ月前、二週間前には、料金と引きかえに、記念乗車券が、送られていた。

月刊雑誌「旅窓」の記者、津山研一も、その記念乗車券をポケットに入れ、同僚の乗兼由紀子と、10番ホームに上って来た。

編集長の田口から、このミステリー列車の取材を命じられたのだが、国鉄は、取材だからといって、特別に、切符を用意してくれはしなかった。そこで、人海戦術をとり、八人の編集部員はもとより、その家族まで動員して、応募のハガキを書き、その一枚が、やっと当選したのである。

ホームは、夜の十一時過ぎだというのに、多勢の見送りの人で賑にぎわっている。小学生が一人で乗って行くのへ、家族全員が見送りに来ていたりするからだろう。

10番線には、すでに、十二両の客車が、青い車体を並べている。いずれも、上下二段のB寝台車である。

先頭の電源車は、低い発電機の音をひびかせていたが、十二両の客車を牽引けんいんする電気機関車は、まだ、連結されていない。

「3号車の12の上か」

と、津山は、乗車券を取り出して確認してから、

「下の寝台に、若くて、すごい美人がいると楽しいんだがね」

と、由紀子にいい、ニツと笑った。

「男の人って、そんなことしか考えないのね」

「君だって、お隣りさんが、ハンサムな青年の方が、旅行が楽しいんじゃない？」

「私は、別に、ハンサムな人じゃなくてもいいわ。顔は悪くても、頭がよくて、誠実な人と一緒なら楽しいと思うわ」

「ありがとう」

「え？」

「今のは、おれのことだろう？」

「ふふッ」

と、由紀子が、笑ったのは、編集長や同僚には内緒だったが、津山とは、来年の春頃の結婚を約束していたからである。

津山は、3号車のところまで来ると、ひとりで、車内に入って行っただが、ショルダーバッグを置いて、カメラだけぶら下げて出て来た。

「下の寝台は、予想どおり女性だったけど、これが、小学校六年の女の子だね」

と、津山は、笑った。

2

十一時四十分に、ミステリー号を牽引するEF65型電気機関車が連結された。

子供たちが、正面から、写真に撮ろうとして、一斉に、ホームの先端に駆け出して行く。

〈ブルートレインさつえい上の注意〉

- 1 線路に入らないこと
- 2 青線の外側に出ないこと
- 3 ホームを走らないこと
- 4 立入禁止の場所に入らないこと
- 5 係員の指示に従うこと

以上のことを守らないときは、写真さつえいを禁止します

そんな掲示が立っていたが、子供たちは、完全に無視してしまっている。自分の乗る列車の写真を、どうしても撮りたいのだろう。

津山も、前方に廻って、写真を撮った。

EF65型直流電気機関車は、濃いブルーの車体で、正面の上半分だけが、淡いだいたい色に塗られている、ブルートレインを牽引する代表的な電気機関車である。

正面に、「ミステリー号」と書かれたヘッドマークがついていた。「富士」とか、「はやぶ

さ」というヘッドマークの代りだろう。大きな「？」マークをあしらった、なかなか凝ったヘッドマークだった。

「写真を撮ってあげるから、機関車の横に立ってみて」

と由紀子がいい、自分のカメラを構えた。

津山は、機関車の横に立って、ポーズをとりながら、
「上手く写るのかねえ」

と、からかった。

まだ、発車まで、十五、六分ある。

津山は、煙草に火をつけた。

「ミステリー列車っていうけど、どこへ行くのかしら？」

由紀子が、客車のドアの傍そばにある行先表示窓を見ながらきいた。

そこには、西鹿児島とか、大阪といった行先が表示されるのだが、行先不明が売りものだけに、この列車の場合は、白くなっている。

「わからないが、この列車の発車時刻を見ると、だいたい、想像がつくね」

津山が、自信ありげにいった。

「発車時刻って？」

「これを見ろよ」

と、津山は、丸めて、ポケットに突っ込んであつた時刻表を取り出して、東海道本線の下

りのページを開いた。

由紀子が、横からのぞき込んだ。

「ここを見ると、急行『銀河53号』が、東京駅を、二三時五九分に発車することになっている。このミステリー列車と同じ時刻、同じ10番線だよ」

「でも、この銀河53号は、季節列車でしょう？」

「ああ、ここに書いてあるように、九月十一日しか運転しないんだ。だから、ミステリー列車は、使われていないこのダイヤを使って走るんじゃないかと思うんだがね」

「とすると、行先は京都かしら？ 銀河53号の行先が京都になっているから」

「まず、間違いないと思ってるんだがね」

と、津山は、得意げに鼻をうごめかせた。

「でも、銀河53号は、寝台車じゃないわ。一般の座席指定車になってるわ。それに比べて、ミステリー列車の方は、寝台特急フルトレインだから、行先も違うんじゃないかしら？」

と、由紀子が、疑問を口にした。

二人が、そんな話をしている横では、小学生らしい男の子に、若い両親が、注意を与えている。

「何か困ったことが起きたら、すぐ、車掌さんに相談するのよ」

と、若い母親が、繰り返している。

父親の方は、「まあ、元気に行って来なさい」と、当らずさわらずのことをいっている。

「俳優の西本功だわ」

と、由紀子が、小声で、津山にいった。

そういわれて、見直すと、若い父親は、確かに、最近、精悍^{せいかん}なマスクで売り出してきた西本功である。

十歳ぐらいの息子の方も、眼のところなど、父親の西本にそっくりだった。

四百人も乗客がいるのだから、その中に、俳優の息子がいても不思議はないし、他にも、有名人なり、その家族が、乗っているかも知れない。

津山は、西本親子に向けて、カメラのシャッターを切った。雑誌にのせる記事の中に、西本親子のことを書き加えれば、記事にふくらみがでてくると思ったからである。

3

——臨時列車「ミステリー号」は、間もなく発車いたしますから、車内でお見おくりの方は、すぐ、ホームへお降り下さい。

駅のアナウンスが、そう告げている。

見送りに来た子供の中には、車内に入って、寝台に寝転んだりしているのがある。

津山は、3号車の入口のところに立って、ホームの由紀子に、

「編集長によろしく。帰り次第、原稿を書くといつてくれよ」

と、いった。取材に行つたあとの原稿がおそいと、いつも、編集長の田口にいわれていたからである。

ホームの時計が、二三時五九分を示し、発車を告げるベルが鳴った。

津山が、突き出していた首を引つ込め、ドアが閉った。が、どうしたのか、また、開いてしまった。そのまま、一分、二分とたったが、なかなか、閉まらない。

「どうしたんだ？」

津山が、大声で叫びた。

「わからないわ。故障でもないみたいだし——」

「いくらミステリー列車だって、発車時刻まで、でたらめじゃ困るね」

と、津山が笑つたとき、階段を駆け上ってくる車掌の姿が見えた。

大きな風呂敷包みを抱え、息せき切つて、ホームに駆け上ると、車掌室のある7号車に飛び込んだ。

7号車の近くにいた見送りの人たちの間から、笑い声があがった。あわてふためいて、客車に飛び乗った車掌の恰好が、ユーモラスに見えたからだろう。

「車掌さんを一人、置き去りにするところだったみたいね」

由紀子が、笑いながらいった。

「国鉄も、最近、たるんでるなあ。今度、雑誌で——」

津山が、いいかけている中に、ドアが閉まった。

（雑誌で、叩いてやらなきゃあ）

とでも、いいかけたのだろう。ガラスの向うで、口惜し^{くや}そうにしている津山の様子がおかしくて、由紀子は、くすくす笑ってしまった。

今度こそ、寝台特急「ミステリー号」^{フルートレイン}は、ゆつくりと、動き出した。

細い白線が一本入った、鮮やかなブルーの車体が、静かに流れていく。

由紀子は、手を振った。

列車のスピードが、次第にあがっていき、最後の客車も、由紀子の眼の前を通過していった。

由紀子は、ホームから身を乗り出すようにして、列車を見送った。

「ミステリー号」と書かれたテールマークと、赤い尾灯が、小さくなり、やがて、ブルーの車体と共に、夜の闇の中に消えた。

その瞬間、由紀子は、このまま、本当に、津山を乗せた列車が、闇の中に消えてしまうような気がして、あわてて、視線をそらせた。

なぜ、馬鹿げたことを考えたのだろうか？

結婚を約束しながら、何となく不安定な津山との関係のせいだろうか。

それとも、行先不明のミステリー列車のせいだろうか。

行先不明といっても、それは、乗客が知らないだけのこと、企画した国鉄は、わかっているのだし、列車の機関士も車掌も知っているのだ。それに、八月十日の午前九時三十分